

日本庭園学会ニュース

The Academic Society of Japanese Garden News

NO. 83
平成27年

予告 平成27年度 日本庭園学会関西大会

発行 日本庭園学会(会長 鈴木久男)
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学 地域環境学部 造園科学科
ガーデンデザイン研究室内
TEL(03)-5477-2430(鈴木誠研究室)
<http://www.soc.nii.ac.jp/asjg/>

予告 平成27年度 日本庭園学会関西大会

平成27年度の関西大会は、平成27年11月7日(土)・8日(日)の2日間、大阪府三島郡島本町の島本町立歴史文化資料館(旧麗天館:最寄駅:JR東海道線島本駅、阪急電鉄水無瀬駅)を会場として開催する。

1日目の11月7日(土)は、午前に現地検討会(水無瀬神宮燈心亭とその庭、水無瀬離宮推定地探訪:島本町教育委員会と共催予定)を、午後に公開シンポジウムが行われる。2日目の11月8日(日)には、終日研究発表会を実施する。

公開シンポジウムのテーマは、「庭園遺構の保存と移築 - 現状と課題・展望 -」である。これまで都市開発に伴い発掘された庭園遺構の保存については、移築という手法が用いられることがあった。それは、遺跡全体が取り壊されても、部分的に庭園が保存されるという点で、効果的な手段と考えられてきたからである。しかしながら、庭園の移築時に行われるべき調査のあり方や、移築先の選定基準、移築技術などについて、これまで本学会において十分な議論が行われてきたとはいえない。

一方で、近年、移築された庭園遺構が、再び都市開発によって取り壊されるという事態が生じている。その背景には、「移築保存」の有効性を担保する行政的な制度の不備という根本的な課題があるといえる。以上のような庭園遺構の移築が抱える現状と課題について、考古学と庭園学の研究者さらには土地の所有者、行政の立場から議論する。

■プログラム(予定)

シンポジウムの主旨説明

- 話題提供1 庭園遺構の保存・移築事例について
 - 話題提供2 庭園遺構の立地・構造・材料・工法・意匠の把握と移築技術
 - 話題提供3 庭園遺構の保存に関わる行政制度の現状と課題
 - 話題提供4 庭園遺構の移築と利活
- 討 議

詳細は後日お知らせします。

■研究発表の申し込み受付について

研究発表会での発表希望者は、下記の要領にしたがって申し込んでください。発表時間は、ひとりあたり 25 分とし、発表 20 分、質疑応答 5 分を予定しています（但し、発表者数によって変更する場合があります）。また、発表には P C プロジェクターの使用が可能です。

◆発表申込み、発表要旨提出期限

平成27年 9 月 20 日（日）

◆申込み方法

発表者氏名・所属・題名・連絡先を明記し、発表概要（200 字程度）を添付のうえ下記の「発表申込先」まで送付すること。原則的には E メールとするが、郵送もしくは F A X でもかまわない。

◆発表要旨提出期限

平成27年10月18日（日）（本文版下原稿の郵送期限）

E メールでの送付の場合は、同日 17 : 00 までとする。

◆執筆要領

全発表者分を研究発表要旨集として印刷し、当日参加者に配布する。原稿はそのまま要旨集の版下とする。そのため、ワープロを使用しての作成すること。分量は、A 4 判で 2 ページもしくは 4 ページ、6 ページとする（奇数ページでの原稿は、受け付けないので注意すること）。

1 ページあたりの文字数及びページレイアウトは、学会誌の論文の書式に準じ、横書き 2 段組、1 段あたり 25 字 40 行となっている。なお、書式はホームページからダウンロードが可能となっている（研究発表要旨書式：PDF/ Microsoft word）。申し込みと資料提出の締め切り日は厳守のこと。

◆発表の申込み先・本文版下の提出先

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター気付

日本庭園学会関西支部事務局

（担当者：関西支部長 仲 隆裕）

ファクシミリ：075-791-9127

E-mail:naka@kuad.kyoto-art.ac.jp

レポート

平成 27 年度全国大会 公開シンポジウム(6/14)

「江戸庭園の新地平」

今年度のシンポジウムは、最初に座長である生活史研究所研究部長の玉井哲雄先生から、江戸の大名庭園研究の最新の情報を交え、近世都市江戸における庭園の意味を考古学、造園史、建築史による学術的な観点から考察するという趣旨説明からはじまり、パネリストの発表となった。

早稲田大学人間科学学術院教授の谷川章雄先生は、考古学の観点から、仙台藩伊達家芝口邸、讃岐高松藩松平家小川街邸、尾張藩徳川家市谷邸の発掘調査から大名屋敷と庭園の関係性について述べられた。遺構と絵図などからみる藩邸の空間、閉ざされた空間でどんな暮らしをしていたのか、特に、大泉水だけでなく、屋敷のどこどこに小さな池もあったということ、何千人もが働いている囲われた屋敷内で、ゲストを迎える場所、プライベート空間など庭園が重要な意味を持っていたと解説していただいた。

東京農業大学地域環境科学部教授の服部勉先生は、造園史の観点から、東京オリンピックを視野に旧浜離宮庭園内の「延遠館」復元再検討の中、当時の利用意図をきちんと理解することの重要性を述べられた。将軍の利用実態を再度紐解かれたご発表の中で、特に興味深かったのは、接待される側の見聞録的なものはあるが、お殿様自身が遊んだような記録がないということ、浜御殿では鴨狩を楽しみ、お殿様が安らぐ非公開の場であったはず、だからこそ公式な記録は残されていないであろうということ、浜御殿も閉じた空間であったということである。さらに今後も立地を活かした江戸大名庭園のすばらしさアピールすることには賛同できた。

東京大学埋蔵文化財調査室の原祐一先生は、考古学の観点から不忍池周辺の藩邸（水戸藩、富山藩、高田藩）が、それぞれ景観を重視して造成されたことを述べられた。藩邸から見える不忍池と忍ヶ丘の景観、忍ヶ丘からみた向ヶ岡の景観を意識していたであろうということ、不忍池を西湖とみたとて借景とていたという文献をもとにGPSデータや、不忍池に映る月の見え方などからも検証された。当時の光景が目には浮かぶようであった。ここでもひとつひとつの藩邸は閉じた空間であったことがわかった。

文京区教育委員会の池田悦夫氏は小石川後樂園の修復工事に先駆けた確認調査から、今まで絵図や文献資料でしか知りえなかった作庭時の意匠や歴史の変遷を考古学の観点から明らかにされた。内庭は、御殿にあり、ここも閉じた空間であった。考古学からみた遺構、池内の堆積物などから、内庭の池の汀線の変遷、大泉水の見え方など貴重な新事実を述べられた。

最後に総合討論が行われた。谷川先生が冒頭で、江戸府内の約7割が武家地であったと述べられているが、その武家地はみな選べたわけではなく、与えられたものであったという。これらの場所は、それぞれの藩邸を形成するのであるが、みな閉ざされた空間であったことが伺われる。屋敷内の憩いの場、ゲストを招く場として、魅力的な空間としてのお庭づくりや、よい景観を得るためにそれぞれ工夫を凝らしていたことが、今回のシンポジウムの企画ならではの、考古学、造園史、建築史から得られた事実を複合し、明確化され、より発展した大名庭園の捉え方ができたのではないかと思う。学域の横断的解釈が庭園研究の新光を放った素晴らしいシンポジウムであった。

東京農業大学造園化学科特別研究員
ホームストネットワーク(株) 牧田直子



平成 27 年度全国大会公開シンポジウム



平成 27 年度全国大会 研究発表

レポート

平成 27 年度全国大会 現地検討会 (6 / 13)

6月13日(土)午前中、東京大学の赤門前に集合した後、同大学構内にある、懐徳館庭園と育徳園庭園(三四郎池)を同大埋蔵文化財調査室の原祐一氏の案内で見学しました。

この2つの庭園はどちらも加賀前田家のゆかりの庭園ですが、作庭の経緯はそれぞれ大きく異なっています。最初に見学した懐徳館は、明治に旧藩邸の敷地の一部を政府から与えられた敷地に造営された前田家の本邸です。西洋館・日本館の2棟が完成したのは明治の末頃になりますが、それ以前から今に残るような池庭が作られていました。大正の末に前田家から東京大学に寄贈されますが、昭和20年(1945)の東京大空襲で建物は焼失し、その後、池の水も絶えて枯池になっています。そのため、かつてとは趣きが異なる部分もありますが、西洋館を背景にして雄大な護岸石組が施された池の様子を写した古写真を見ながら、かつての姿を思い浮かべつつ庭園を一巡し、池や中島、滝流れや築山などを見学していると、池の中島に架かっていた石橋の基礎となっていたと思われる石や、園内の水を循環させていたポンプ施設が残っ

ているのが見て取れました。

続いて、育徳園庭園に向かいました。夏目漱石の『三四郎』の舞台となったため、三四郎池の名がすっかり定着していますが、歴史的には、江戸時代の初めに加賀藩主前田家の藩邸の庭園として作られた回遊式の庭園で、3代将軍徳川家光が訪れるなど、早くから接遇や遊興の場として用いられました。5代目藩主前田綱紀によって育徳園と命名され、八景や八境が選定されて和歌や漢詩が詠まれ、園記も記されるなど、かつては江戸の名園の一つに挙げられていました。園内は樹木がうっそうと生い茂っていましたが、かつて亭があり、視点場となっていた場所や、江戸時代の絵図にも描かれている築山の石組を原祐一氏にご案内・ご解説いただき、かつての庭園の情景を思い起こしながら池の周囲を一巡し、見学会を終えました。

植彌加藤造園(株) 菅沼裕



平成 27 年度全国大会現地検討会

【会費納入のお願い】

学会費の納入額をご確認のうえ、納入のほどよろしくお願ひします。また、過年度滞納の方は併せて納入のほどよろしくお願ひします。詳細は当学会 HP(<http://www.jgarden1992.jp/nyuukai.html>) をご参照ください。

協力者：牧田直子、菅沼裕、藤原千晶

日本庭園学会広報委員会

今江秀史、加藤友規

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342